英米におけるグリーン研究

行　安　　茂

Studies on T. H. Green in England and America

Shigeru YUKIYASU

はじめに

1882年3月26日朝グリーンがこの世を去ってから今年は90年に当る．約1世紀が近づくわけであるが，今日英米においてグリーンはどのように研究されているであろうか．また今日までどのように研究されてきたであろうか．倫理学における言語分析や哲学における論理実証主義が今日流行されている状況下ではグリーンはシジウィックに比べれば無視されている観がないでもない．にもかかわらず敢てグリーンを研究する現代的意味が果してあるであろうか．この疑問に答えておくためにも，またグリーンを将来どのように研究して行ったらよいかを考えるためにも，今日までグリーンがどのように研究されてきたかを考察することはわれわれに何かを考えさせるであろう．

グリーンの思想は第19世紀のイギリスの歴史的社会的制約の下に誕生したところの過去の産物にすぎないとしばしばいわれる．自由主義者としてのグリーン，社会改革者としてのグリーン，急進主義者としてのグリーン，理想主義者としてのグリーン，これらによって表現されるグリーン像はいかにも19世紀的である．グリーンの思想および学問は形而上学，神学，哲学，倫理学，政治哲学，社会学に分けて考察される．それ故にまたグリーンの思想はこれらの方向に発展する要素を含んでいるとみることができる．グリーンは信念の人であった．かれの学問はかれの信念の学的表現である．これは人々に感化を与えることには好都合であるが，用語のあいまさ，くり返しの多いこと，定義がなされていないことなどの欠点を伴なった．今日の英米において言語分析や論理実証主義が発展したのはグリーンの理想主義への反動としてあるが，この反動は言語を厳密に吟味しようとするイギリス哲学の伝統への復帰であろう[1]．

最近グリーンおよびグロースの編集によるヒュームの著作がドイツから出版されたが[2]，これはグリーンの「一般的序論」および「人性論の道徳的部分への序論」が注目に価するものとみられたためか，あるいはヒュームの経験論を再考察する必要があるためか，のいずれかによるのであろう．また，アメリカにおいても最近グリーンの「ヒュームの『人性論』に対する序論」および「ヒュームの『人性論』の道徳的部分に対する序論」の二つの論文が単行本として出版された[3]．これも同じ理由によるものとみることはできないであろうか．レモスはグリーンとヴイットゲンシュタインとを比較し，両者の類似性を指摘する．「オックスフォードでグリーンがかれの同時代の人々に与えた印象はルードヴイッヒ・ヴイットゲンシュタインが30年代および40年代にケンブリッジで同時代の人々に与えた印象とある点において，しかしある点においてのみ似

類している．ヴイットゲンシュタインはこの40年代の期間中ケンブリッジで支配的な哲学的人物であったであろうように，グリーンは1870年代の初期からかれの死までオックスフォードで支配的な哲学的人物であった．グリーンの存在と活動とはヴイットゲンシュタインによって同時代の人々のある人によって引き起された熱狂に幾分似た熱狂をオックスフォードの同時代の人々のある人に引き起した」[4]．アメリカにおいてグリーンのヒューム批判が注目されたのは何故であろうか．それはヒュームの経験論を弁護するためにはグリーンのヒューム批判をもう一度考えてみる必要があったからである．アメリカにおいてはヒュームへの関心が起りつつあるのかもしれない．以上のように，米国やドイツにおいてグリーンのヒューム批判が注目されつつあることはわれわれとしても見のがすことのできない傾向である．以下今日までのグリーン研究状況を考察することによって今後の課題を見つけたい．

I

グリーンの哲学・倫理学は W. H. フェァーブラザーによって研究され，その著「トーマス・ヒル・グリーンの哲学」(1900) において詳細に研究されている．本書の内容はグリーンにおける形而上学の方法，形而上学の結果，人間の自由，道徳哲学，政治哲学，グリーンとその批評家となっている．これからわかるようにグリーンを全体にわたって体系的に研究しているのであるが，専門的に研究を深めたものではなくて学生や初歩の研究者に対する入門書として書かれている．著者はいう，「私の目的は同じである，すなわち，T. H. グリーンの哲学的教えを簡単にはっきりと説明することである．このような説明はそれ自身の価値をもつべきであるが，私の真の目的は若い学徒をしてグリーンを自分自身で読ませることを助けることである」[5] と．グリーンの思想は体系的である．それ故，いわる哲学だけをかれの学問領域からとり出して論究することはグリーンを正しく理解することにはならない。それは他の哲学者の場合においてもいえるであろうが，グリーンにおいてはとくにそうである．「グリーンの形而上学的，道徳的，政治的哲学はかくして一つの全体を形成し，すべての地平をおおう意味において完全であるばかりでなく，全くそれ自身と首尾一貫した生活論を提示する」[6]．すなわち，グリーンにおいては形而上学，道徳哲学，政治哲学の三つは一つのものであり，これら三つの領域から成る全体がかれの哲学全体である．かれの哲学が体系的であるのはそのためである．フェアーブラザーはこの点を把握した上でグリーンの哲学を全体的にはっきりと伝えようとするのである．「トーマス・ヒル・グリーンの哲学」の最後に招介されている「グリーンとその批評家」はわれわれ日本人にとって注目すべき部分であろう．批評家は「ヘーゲル主義と人格」の著者セッス，バルフォー，シジウィックの三人である．これらの批評家はグリーンをどのように批判したであろうか．グリーンにおいて問題となった点は何であったであろうか．それは永久的自我が超時間的であるとみられながら，いかにして時間において再現されるかということである．人間は動物的制約の下におかれていながらこの制約の中でどのようにして再現されるのであろうか．人間は永久的満足をこの限られた世俗的生活において見出すことができるであろうか．これらの問題がかれらにほぼ共通し

ていたようにみえる．とくに，シジウィックのグリーン批判は公平であり，客観的であり，あらゆる問題点を見出しつつ，その矛盾に迫ってゆく．グリーンがシジウィックによってどのように批判されたかについてはすでに少し考察したことがある[7]．シジウィックはグリーンの死後，1884—1885において「マインド」誌上にグリーン批評論文を掲載した．これがまとめられて「グリーン，スペンサー，マーチノーの倫理学についての講義」となって刊行された．

では何故シジウィックはこれら三人をとりあげたのであろうか，思うにこれら三人は第19世紀のイギリス倫理学を特色づける異色の哲学者である．「1874年『倫理学の諸方法』が刊行される以前には……イギリス倫理思想における顕著な教説は直覚的見解と功利主義的見解であった．そしてこれらは一般に互いに全く敵対関係にあるものとみなされていた．後にはシジウィック教授は超越論者と進化論者とを同時代の英国倫理学においてかれ自身の体系の主要なライバルとしてみなした」[8]．グリーンはこのようにみられていたわけであって，シジウィックにとってはグリーンの倫理学と自己のそれとを比較し，それぞれの問題点を指摘する必要があった．とくに，グリーンの快楽主義批判に対してはシジウィックは十分答えておかなければならなかった．シジウィックには「カントの哲学についての講義および他の哲学講義と諸論文」(1905) がある．これらはかれが1899年から1900年までの間に講義したものであって，かれの最晩年の講義である．グリーンについては60ページ近くのスペースがあてられている．シジウィックはグリーンの形而上学（「倫理学序説」第一編）を「常識」(Common Sense) の立場から批判した．とくに本書の中の「グリーンの形而上学についての講義への付録」はシジウィックの指摘する問題点がよく現われている．すなわち，グリーンの形而上学は Mentalism に立つものか Spiritualism に立つものか，いかなる意味における Idealism であるのか，といった問題がとりあげられる．グリーンの倫理学を根本的に理解するためには Divine Spirit, Eternal Mind をどのように解釈したらよいかということが重要である．

以上はグリーン批判を中心に少し考察したものであるが，つぎにグリーンに共鳴する研究者の側から試みた人としてレイモントがあげられる．かれには「グリーンの道徳哲学入門」(1934) がある．この著作の意義と価値とについてはすでにふれたことがあるので今ここでは深入りしない．ただ，本書のねらいについて著者レイモントの言葉を要約しておこう．その第一は「序説」全体を節ごとに要約し，その第二は体系的と考えられる順序に従って節を配列し，このようにして若干「序説」を修正しながらグリーンの教説を解釈しようとすること，これら三つのねらいがかれの著作の目的であった．つぎに J. マッカーンの「六人の急進的思想家」(1910)があげられる．本書についてもすでに考察したが[9]，ここでは重複をさけるために別の観点からその内容の一端にふれておこう．グリーンは制度と理性との関係をどう考えたであろうか．グリーンがこの関係を考察するに至ったのはヘーゲルの影響によるとみられたためか，マッカーンはグリーンとヘーゲルとの比較を試みつつ，しかもグリーン独自の思想を示そうとする．グリーンは「政治的義務の原理」の中で国家の干渉を問題とした．国家はどの程度まで個人に干渉することができるか，個人が国家に抵抗し得るのはどのような理由によるのか，これらの問題がグリーンの関心事であっ

た．グリーンはそれを解決する原理を求めた．マッカーンはグリーンの問題意識を以上のようにとらえている．「グリーンに社会主義者のように国家干渉に味方したのでもないし，またブライトやコブデンのように反対したわけでもない．しかしこのことは妥協からくるのではなくて原理からくる．そして就中，国家干渉はかれの自由の概念によって決定される．かれの目が他の場合におけると同じようにここでも固定した目的は市民の性格の，『すべての人の側で平等にかれ自身を最もよく生かす力』の発展である」[10]．マッカーンの研究は「政治的義務の原理」に関心をもってこれと「倫理学序説」との関連を明らかにしようとしたものである，ということができよう．

20世紀に入るとグリーンの倫理学は G. E. ムーアやラシュドールによって哲学的に吟味され，批判されてきた．この人々は倫理学を新しい方法的見地から研究して行った．ムーアには「倫理学原理」(1903) があり，ラシュドールには「善悪論」(1907) がある．後者が年令は上であるが，主著はこのようにムーアよりも遅れている．ラシュドールは「ムーアの非常に有力な論文『倫理学原理』，これは私自身の研究が実際完成したとき現われた」[11] といっているように，「善悪論」の刊行は遅れたが両者の研究方法は偶然か必然か類似している．ラシュドールは本書を何故書いたのであろうか．本書を開くとまず第一につぎの言葉が目につく．「私の先生，トーマス・ヒル・グリーンおよびヘンリー・シジウイックの記念に」と題されており，また「私は故トーマス・ヒル・グリーン教授の講義と私的授業に大学生として常に出席していた」[12] といわれているように，ラシュドールはグリーンを尊敬し，共鳴していたようにみえる．しかしそれはかれの学生時代のことであってその後かれはグリーンを批判して行ったようにみえる．もちろん，これによってラシュドールはグリーンの人格と学問の価値がないとは考えなかったとみなければならない．ラシュドールがグリーン倫理学を批判するのは何故であろうか．かれが云わんとするところを要約すればつぎのようになる．第一に，道徳哲学は哲学よりもやさしい哲学の一部分である．哲学を学ぶ初歩の人にとっては道徳哲学はよき入門となるが，この学問が問題にとりあげる「善」,「正」,「義務」は結局哲学の問題である．グリーンにおいてはこれらの意味が十分検討されていなかったとラシュドールは見ている．ここで道徳哲学に対して云われている哲学は論理学および形而上学である．これに心理学もつけ加えられる．第二に，ラシュドールは19世紀末から20世紀にかけて倫理学の体系的な概論書はあるが，これは当時の学生の欲求を満足させなかったという．それは何故であろうか．学生たちは道徳哲学の根本問題を形而上学的に深く考えようと欲していたからである．ラシュドールの念頭にあった概論書とはミュアヘッドの「倫理学初歩」やマッケンジーの「道徳哲学入門」である．シジウィックの「倫理学の諸方法」やグリーンの「倫理学序説」がやさしい著書とみられるかどうかは疑問であろう．ラシュドールによればこれら2人の偉大な哲学者は「主題について最後の言葉」を云ったものとは見られなかった．シジウィックやグリーンが「道徳哲学の主要な問題についての新鮮な体系的な扱い方」をしなかったとは決していえないであろうが，その扱い方が時代の経過とともに違ってきた．ラシュドールは新しい扱い方によって「善」,「正」，の意味および定義を倫理学的になそうとする．言語分析によるこうした意味論

が20世紀に入ってから次第に注目されてきた．「グリーンの死後以来経過してきた時期――¼世紀であろう――は大きな哲学的活動の時期であったし，（私はあえて考えようとするのだが）大きな哲学的進歩の時期であった」[13]．この意味においてグリーンはイギリス倫理学史において一つのエポックメーキングをなしており，かれの死を境にして倫理学の研究方法が大きく転向し始めたといえる．グリーンやシジウィックの倫理学はイギリスの19世紀の倫理学界を動かす力となったわけである．ラシュドールの「善悪論」はグリーンよりもシジウイックから影響されているようにみえる．

ラシュドールはオックスフォード大学の人であるが，20世紀に入ると偶然にもケンブリッジ大学からムーアがラシュドールの方法に近い方法によってグリーンを批判し始めた．名著「倫理学原理」においてグリーンは以下のように批判されている．「かくしてグリーンは『善の共通な特色はある欲求を満点させることである』とはっきり云っている．われわれがこの陳述を厳密にとるべきだとすれば善きものはそれがある欲求を満足させることを除けば何ら共通の特色をもたないことを上の陳述は明らかに主張する，……．そしてこのことは，善であることが欲求を満足させることと同一であるならば，すなわち『善』が『欲求の満足』の別名であるにすぎないならば，事実であり得るにすぎない．自然主義的誤りのこれほど明らかな例はあり得ないであろう．そしてわれわれはこの陳述を単なる言葉の上すべりとして考えることはできない（このことはグリーンの主要な議論の妥当性に影響するものではない）．何となればグリーンは，あるものが特殊の種類の欲求――かれが道徳的行為者の欲求であると示そうとする欲求の種類――を満足させようとするものであることを除いては，何らかの意味においてそれが善であると信ずる理由をどこにも与えていないか，あるいは与えようとしていないかのいずれかであるからである．不幸な二者択一がわれわれの前にある．かかる推理は，善であることと特殊の方法によって欲求されることが同一であるならば，そして同一であるときのみ，かれの結論に対して妥当な理由を与えるであろう．この場合，われわれは第1章において見たように，かれの結論は倫理学的ではないであろう」[14]．

ムーアは善の意味を考える．かれは善であることと欲求が満足されることとは別であると見るが，グリーンはこれらを同一視しているという．ムーアにおいては「善とは何であるか」という問題は「ある方法によって意志されるものは何であるか」という問題から区別されなければならない．同じように，「何が善であるか」は「何が善であると考えられるか」から区別されなければならない．ムーアは善と意志，善と欲求，善と思惟とを異ったものと考えるが，形而上学的倫理学者（グリーンもこの中に含まれる）はこれらを混同して考えているとされる．ムーアは善を意志，欲求，思惟といったいわば主観的作用から離れたものと見る．それ故，グリーンにおいて善であることと欲求の満足とが同一でないならば，かれの結論は倫理学的でありかつ正しい，といわれる．ムーアは善をどのように考えようとするのであろうか．今までの形而上学は「善それ自身は何であるか」という問題に答えなかったといわれるから，ムーアは善それ自体の意味を考えようとしたことがわかる．善それ自体は考えられた善とは違っているとみられる．考えられ

た善は外見的善であり，意志された善も外見的善であるにすぎない，とみられる．では本質的な善，善それ自体はどのようにして正しく知られるというのであろうか．ムーアはあるものが「ある仕方によって」意志されることが善であり，これが善の標準であるという．しかしこの「ある仕方」がどのようなものであるかは明らかにされていない．かれは「『善』は究極的な，分析することのできない述語を示している」[15] といっていることから考えると，善の意味を分析しようとしていたことがわかる．ムーアのこのような分析的方法にもとづく倫理的言語の分析は H. A. プリチャードの「道徳的義務」(1949) にも見られる．本書の第4章は「グリーンの政治義務の原理」となっていて，ここでかれが用いている重要な概念，たとえば obligation, right, a system of rights and obligations の意味は法律的にも道徳的にも理解されるあいまいさがあった．プリチャードがそれぞれの用語の意味を確定しようとしたのはこの混乱がグリーンにあったからである．この混乱とあいまいさとを整理し，かくしてグリーンが云わんとしたものが何であったかを明らかにする仕事が言語分析の意義である．グリーンは体系的な思想家であるからかれの信念を表現することに関心をもっていたであろうから，一つ一つの用語に対して注意深い検討や定義をする余裕がなかったのであろう．このことがグリーン以後の学者を分析的方法による倫理的言語の意味論へと向けた一因となったものと見ることができよう．

II

つぎに倫理学史および哲学史（主としてイギリスのそれ）においてグリーンがどのように見られ，位置づけられ，評価されたかを考察してみよう．それに入る前にグリーンによって影響された人をあげておこう．W. ウォレス (1843—97) はヘーゲル研究者であり，グリーンの死後かれの後継者であった．静かな，「陰とん的」性格からくる地味な，素朴な哲学者ウォレスはグリーンの一面と相通ずるところがあったようにみえる．そのためか両者はつぎのようにみられている．「ジョーウィットもグリーンもウォレスの性格と力とを高く評価した．そしてウォレスはかれの知的発展において2人から強く影響された．グリーンからはウォレスは哲学の研究，とくにドイツ哲学の研究に向って一層刺戟を受けた．そして長く最後までウォレスは『真理への崇高な精神的献身および永遠の深い事物についての熱心かつ大胆な思考のあの見本』にお陰を負うていることを話していた」[16]．「あの見本」とはグリーンをさしているようである．ウォレスがヘーゲル研究に志したのもグリーンを通してドイツ哲学に開眼されたためであるかもしれない．ウォレスはエピクロス，ルソー，ニーチェ，ワーズワースの名前をあげて議論する習慣があったというから，すべての面においてグリーンに共鳴したとはいえないにしても，グリーンと共通した思想（自然を愛する詩的トーン）をもっていたことは十分うかがえる．

哲学者としてのグリーンの一面を受継いだ人がウォレスであるのに対してグリーンの宗教的実践的側面を受継いだ人は A. トインビー (1852—1883) である．トインビーは経済史家であり，その著「英国における第18世紀の産業革命についての講義」は有名である．かれについては「あらゆる見にくい卑俗な言葉使いに対するかれの嫌悪は努力なしの本能的なものであった」[17] とい

われているが，これはグリーンの人格と非常によく似ている．またかれには「子供じみたはつらつさ」と「考え深い男性の静かな威厳」とがよく調和されていたという．単純と静寂とがトインビーにおいて著しい特色をなしていたのである．かれの思想はキリスト教的理想主義である．それはキリスト教に裏づけられたものであるが．「無感動な神秘主義」はトインビーの嫌うところであった．かれの信仰は「合理的信仰」であり，実践的であった．献身，奉仕，愛の三つがかれの信仰の特色であった．「かれがもっている理想主義は人類の善への精力的な献身によってのみその存在を正当化することができるとかれは常に感じていた」[18]．かれにとってもグリーンと同じく信仰と理性とが矛盾なく結合されていたようにみえる．グリーンから学んだのもこの点であったとみてよいであろう．グリーンから学んだものはこの外に社会改革への情熱であった．トインビーが「共済組合および労働組合会議」の発展に従事したり，「救貧法委員」となったりしたのはその現われとみることができる．トインビーは1873年にオックスフォード大学に入り，以後グリーンとの接触を深め，影響を受けた．「トインビーと古い人々（これらの多くの人々は幾分興味ある問題を与えるであろうけれども）との知己について詳しくのべる時間は私には許されないであろう．しかし私がのべざるを得ない２人の名前がある……．それはトーマス・ヒル・グリーンとリチャード・ルイス・ネットルシップである．ジョーウィトとトインビーとの間の親交は最初は幾分びっくりさせるかもしれないとすれば，グリーンとトインビーとの間の親交は世にもないほど自然であった．何となればこれら二人の間では強い精神的類似性があったからである．かれらは道は非常に違っていたけれども，宗教，哲学，社会的問題においてほとんど同じ位置に達していた．そしてトインビーがとくに指導者として師として尊敬した古い知己の中に誰か一人いるとすればそれはグリーンであった．他方，ネットルシップ（かれはトインビーより年長者であったけれどもトインビー自身の年令により近かった）との関係はもっと普通の仲間同志の関係であった」[19]．トインーの人格，思想，関心はグリーンのそれらにほとんど偶然にも近く，そのために「自然に」かれらの間に「親交」があったのであろう．不幸にしてトインビーは31才の若さで他界した．それはグリーンの死後翌年，すなわち1883年のことであった．

つぎにグリーンの影響を受けた人として D. G. リッチー（1853—1903）があげられる．「かれはオックスフォードでの初期において２人の偉大なそして調和的な影響力下にあった．それは T. H. グリーンとアーノルド・トインビーであった」[20]．「政治哲学におけるリッチーの思索がかれに引きつけられた人々におよぼした影響は T. H. グリーンとアーノルド・トインビーの似た影響と同じ原因に負うていた——かれにおいては思想家と市民とが完全に融合していた」[21]．リッチーはグリーンやトインビーから影響されたことは確かであって，かれらから哲学的なものと市民的なもの，思想と行動との二面を学びとった．リッチーが国家の干渉に関心をもったのは市民として考え，自由な人間として行動しようと考えていたからであろう．リッチーは科学と哲学との関連（事実と価値との関係と区別）に関心をもった．これはグリーンの哲学よりも一歩進んでものを考えようとする現われとみえる．「かれはギリシヤ哲学および近代理想主義の訓練から思惟の基本的能度を学びとった．それはいろいろな形式において起源の問題と妥当性の問題，歴史

的方法と論理的方法，事実と意味，描くことと考えること，これらの区別に現われている」[22]．グリーンにおいてはこれらの区別は十分なされていたようにはみえない．グリーンはこれらの区別を自覚していたであろうか．リッチーをしてこれらの区別を促したものは何であったであろうか．それは科学や歴史への関心が高まってきたことによるのではないだろうか．かれが「ダーウィンとヘーゲル」(1893) を書いたのは以上の区別と何らかの関係があるようにみえる．この題目から考えるとリッチーは「理想主義者進化論」がかれの方法論であったのかもしれない．かれは「観念論」と「唯物論」との対立・論争を何とか克服しようとしてその方法を求めていた．かれがたどりついた方法はグリーンとダーウィン的信奉者とから得られたようにみえる．「私はまだ絶望的な論争から脱する道を，とくに一方では故トーマス・ヒル・グリーンの教えや他方では科学的な友人の影響によって導かれてきた方法以外に見ることができない」[23] といわれていることによっても上記の出発点は理解できる．

さていよいよ倫理学史に目を転じ，その中でグリーンがどうみられ，どう評価されているかを考察してみよう．英国倫理学史を中心として書かれたものとして有名なものは H. シジウィックの「倫理学史」(1886) と R. A. P. ロジャーズの「倫理学史」(1911) とがある．両者とも何回も再版を重ねており世界的に知られていることは周知のとおりである．後者はグリーンに近い立場で書かれているようにみえる．前者はいわゆる直覚的功利主義シジウィックの公平な分析によって論究されていて，幸福を問題としながら考察されているようにみえる．したがってシジウィックのグリーンに対する見方もかれなりの関心から現われている．シジウィックは「倫理学史」の中でグリーンの倫理学を欲望論，カントの影響とみられる善意志，アリストレスの影響とみられる徳論の三つに分けて重点的に分析している．シジウィックはカントやアリストテレスについての知識と理解とをもっていたから，グリーンがかれらからどのように影響されたか，かれらをどのように解釈していたかを知ろうとしたのかもしれない．シジウィックはここではグリーンが意志に中心をおいてアリストテレスを見ていることに対しては批判してはいない[24]．シジウィックはグリーンの神的自我や共同善についてもふれていないのは公平な分析を特色とするかれの手落ちのようにみえる．これは「倫理学史」という著書の性格上やむを得なかったのかもしれない．この点，ロジャーズの「倫理学史」はグリーンについては全般にわたってよく行きわたった解説である．しかしこれは深い研究的なものではない．これも本書の性格上さけられないところである．グリーンをよりよく理解するための入門書としてはロジャーズの方がよいよいようにみえる．西洋倫理学史を全般にわたって詳しく知るための入門書としてはシジウィックの著作の方がより適当であろう．

哲学史の上でグリーンの哲学を扱ったものとして注目されるべき著作を二，三あげると以下のようになる．まず，J. セッスの「英国の哲学者と哲学の学派」(1912) があげられる．本書においてはヒューム経験論の発展としてベンサム，ミル父子，スペンサー，スコットランド哲学の発展としてハミルトン，ハックスレー，マーチノー，理想主義の系列としてコールリッジ，グロート，ケアード，グリーンの三部が考察されている．英国哲学はこれら三つに大別されることによ

って特色づけられるという見方である．本書の中で著者は英国哲学の特色をつぎのように指摘しているが[25] これはグリーンの哲学を理解する一助となる．① 実験的帰納的方法，② 認識論的方法，③実践的倫理的関心，これら三つはもとよりそれぞれの哲学者のタイプによって分類されるものであるから，同じ哲学者がこれらの特色をもち合せているわけではないであろう．グリーンは第三の特色，「実践的倫理的関心」の強い哲学者であることには異論のないところであろう．これに対して大陸の哲学は形而上学的思弁的である．グリーンの哲学は形而上学的なところがあるが，思弁的というよりは実践的性格をもっている．グリーンはそれ故大陸的要素と英国的要素とをかねそなえているということができる．著作がグリーンの哲学を知識論，道徳論，神の問題に分けて全体的に見ているのはかれの実践的倫理的性格がそこに見られるとしたからではあるまいか．また，グリーンをヘーゲルとの関連において見ようとするのもかれの中に大陸的要素が存することを示さんとしたからではあるまいか．

つぎに W. R. ソーレーの「英国哲学史」(1920) があげられる．哲学を学ぶためには哲学者の伝記と著作とを関連させて考える必要があるとの見地に立ってであろうか，ソーレーは本書において各哲学者の小伝をまずのべ，つぎにその哲学の主要問題をあげている．これは哲学を研究するときの忘れてはならない点であろう．グリーンについてはどのように扱われているであろうか．かれの哲学の特色はまず生活を正しく考えること，かれが非常に enthusiasm の人であったこと，の二点と密接に結びついている．これがソーレーの指摘したいところである．グリーンの哲学が Philosophy of life であるといわれるのもこのような指摘によるのかもしれない．グリーンが生活を組織的に考えようとし，しかもそれを組織づける原理を求めようとし，あるいはその原理を具体化しようと考えていたことはかれの諸著作から十分うかがわれる．セッスは英国哲学者は他国のそれと違って散文の大家であるとして，ベーコン，ホッブス，バークレー，ヒューム，コールリッジ等をあげているが[26]，グリーンは文章家とはいえないようにみえる．かれの哲学が難解であるのはそのためであるかもしれないが，それだけに深く考えさせるものを含んでいるかもしれない．

つぎに J. H. ミュァヘッドの「アングロサクソン哲学におけるプラトン的伝統」(1931) があげられる．本書の副題「英国および米国における理想主義の歴史の研究」からわかるように，かれはグリーンの思想的後継者として理想主義の起源と発達とを研究する必要があったのであろう．それは何故であろうか．一つにはイギリス哲学といえば，単純に経験論といわれていて，理想主義の伝統は皆無に見られているか，あるいはそれほど重要視されていないものとみられているためであろう．第二に，グリーンの理想主義の伝統や背景をドイツ観念論にのみ求めるという見方は公平であるだろうか，イギリスにおいては19世紀の理想主議の起源は発見されないのであろうか，こういった問題に対する答が求められていたとみてよい．こうした疑問から英国理想主義の起源は遠くはケンブリッジ・プラトニスト（カッドワース），J. ノリス，A. コリアーに求められ，近くはカーライル，H. スターリング，F. H. ブッドレーである．19 世紀の理想主義はドイツ観念論の影響によるところが大きいが，ケンブリッジ・プラトニストたちはグリーンなどの理

想主義者といかなる関連があるのだろうか．この点について指摘する人もあるが，[27] 十分研究されていない．カッドワースにせよ，グリーンにせよ，これらの哲学者およびその学派の人々はいずれも経験論に対抗して理想主義を主張したものであることに共通な特色をもっている．本書はグリーンの理想主義というよりはブラッドレーの理想主義を19世紀のイギリス哲学の代表としてとりあげているので，グリーンについては十分研究されていない．しかし著者ミュアヘッドは本書の冒頭において「エドワード・ケアード，トーマス・ヒル・グリーン，バーナード・ボーズンキットを記念して」と題されているように，グリーンなどから影響された哲学者であるから，かれらの理想主義精神にもとづいて本書を書いたものであることがわかる．グリーン研究にとっては本書は補助的貢献をなしているとみなければならない．

つぎにドイツ人メッツの書いた「イギリス哲学の百年」は大陸からながめた著書であるだけに別の変った見方を示してくれる．グリーンについての見方も以下の如く歴史的である．「かれの思想はそのすべての表現においてドイツ観念論の中で動いていたけれども……それにもかかわらずかれの生れた歴史的状況がドイツ的体系の単なる承認または再現を妨げることにかれは気ずいていた」[28]．グリーンはよく云われているようにカント・ヘーゲルの影響を受けた亜流としてみられているのみではなく，イギリスの歴史的状況に即して理解されなければならない．著者メッツはドイツ人であるだけあってグリーンをカントやヘーゲルとの関連において詳しくのべていることは他の哲学史に見られない努力である．「哲学史におけるグリーンの使命は古い体系を一掃し，理想主義的な種類の新しい総合への基礎を準備することであった」[29] とはヒューム批判であろうし，「グリーンの主要な努力は現象と物自体とのカント的二元論を克服することであった」[30] とはカントを超えてゆこうとする試みである．そして「人間においては神的原理がはたらいているから，人間はかれの生活の単に自然的側面に満足することはできないで，かれの内にあるより高い生活を求めて絶えず努力する」[31] とはグリーン倫理学の根本思想をよく表現している．とにかく，本書は哲学史としては詳細にすぎるほど各哲学者の思想にふれている．グリーン哲学全体のよき入門書ともいえる著作である．

III

つぎにグリーンの政治哲学がどのように研究されてきたかを考察してみよう．グリーンの「政治義務の諸原理についての講義」はその後影響を与え，問題にされ，今では政治学の古典の一つに数えられている．すでにのべたリッチーが「国家干渉の原理」(1696) を書き，本書の第4章において「トーマス・ヒル・グリーンの政治哲学」という題目をとりあげたのもグリーンの上記著作の中に「国家干渉」の問題が論じられていたからである．リッチーはこの問題をとりあげてはいるが十分な考察をしていないようにみえる．グリーンの政治哲学と倫理学との関係が政治学の見地からよく考察されているのはバーカーの「イギリス政治思想」(1915) である．本書の第2章「理想主義派——T. H. グリーン」は約40ページにわたる内容であってかれがカントやヘーゲルからどのように影響されたか，かれらとはどのように違った思想をもっていたか，といっ

た問題をわかりやすくとりあげ説明している．また，グリーンは自由をどのように考えたか，かれの Positive freedom とはどのような意味をもつ自由であったか，を理解する上においてバーカーの解説は有益である．国家干渉についての説明はリッチーのそれより一段と優れていて考えさせられるところがある．それはバーカーがグリーンにおいて常に議論の底流にあり，ときには目的となっているところの人格価値に注目することによって国家干渉の限界を示しているからである．すなわち，国家と個人との関係が倫理的によく説明されているからである．バーカーの「イギリス政治思想」は政治思想史の入門書であるとともにグリーンの「政治義務の諸原理」の研究のための最良の入門書であるということができる．「グリーンが書いてから30年以上が経過した．今日，急進的理想主義者はグリーンの社会的分析のあるもの（たとえば資本についての論じ方）や社会政策についての暗示のあるもの（たとえば小地主階級の唱道および不労増額を手に入れようとする試に対する反対）を単なる保守主義として非難するかもしれないだろう．しかし問題は特定の状況についての分析や特殊の政策の暗示よりもむしろグリーンの諸原理である．諸原理が真であるならば，各時代はそれ自身の必要に適するようにそれらの意味を進歩的に解釈することができる」[32]．

グリーンの理想主義は民主主義の基礎となり得るとの観点からグリーンの思想を再評価した人としてウラムの「イギリス社会主義の哲学的基礎」（1951）が注目されなければならない．何故アメリカの民主主義が注目されたのであろうか．まず第一に，民主主義はキリスト教感情を除いたならば唯物的進歩の相においてしか見られない．ウラムのいうキリスト教感情とは人格を絶対的価値として尊重するカントの思想と人間の内にある神的なものへの信仰との結合からくる感情である．グリーンの理想主義はこのような感情と密接に結びついている．このような感情が民主主義の根底に必要とされたことは民主主義が決して物質的繁栄だけを目的としたものでないことをわれわれに教える．見方によればアメリカの民主主義がグリーンを必要とする段階にやってきたのかもしれない．ウラムは「新し民主主義の国家理論」を求めていたのであって，グリーンの政治哲学はこの新しい方向を示すいくつかの問題を含んでいると見る．本書はバーカーの著書とともに読まれるに価するグリーン研究の参考文献の一つとしてあげることができる．民主主義の本質は何であるかを考える上においてもウラムの理想主義への着目はわれわれに古典への再考を促す．グリーンの理想主義は社会主義（イギリスのそれ）とどのように関連しているであろうか．「今日労働党政府のもっている問題と政策はグリーンやフェビアン主義者の理想によっては説明されないが，しかし政府指導者たちがその問題を分析研究する方法と彼等の従う経済学の哲学的基礎は理想主義と社会主義が鼓すいしてきた思考タイプに直接関係がないことはない」[33]．グリーンの思考法は現在において生きている．それは労働党政府指導者の中に生きているのであろうか．これは個人を重視するという思考タイプを意味しているのであろうか．理想主義は社会主義と相容れないものと考えられやすいが，後者の基礎に前者が必要とされると見るところにイギリス社会主義のユニークさがうかがわれるようにみえる．アメリカにおいてはウラムの著作の外に政治学の方面からグリーンを研究した人としてリヒターがあげられる．かれの「良心の政治学」

(1964) は近頃稀に見るグリーン研究の力作であって，本書の内容についてはすでにその大要をのべたことがある[34]．著者の社会学的方法論もわれわれにグリーン研究について考えさせる．リヒターがグリーンをこのような方法によって研究しようとしたのは何故であろうか．グリーンの思想はかれの著作を熟読・吟味・反省することによって内から理解されなければならない．しかるにグリーンを19世紀の時代的背景から考え直そうとするのは何故であるうか．第一に，グリーンが今まで神秘的に見られたからである．このヴェールを取り除いてグリーンを広い視野から見てゆこうとするのがリヒターのねらいである．第二に，グリーンの理想主義は現実の政策を押し進める影響を与えたが，これは何故であるうか．形而上学に基礎をもつかれの理想主義は何故実践的性格をもっているのであろうか．グリーンの理想主義が社会的政治的に拡大される必要性はどこからきているのか．これがリヒターの方法論を生んだ原因の一つである．第三に，グリーンの理想主義およびこの学派は今まで説明されずにみられてきたからである．

つぎにラスキはグリーンの政治哲学をどのように見たかを考察してみよう．ラスキは「国家——理論と実践」(1935) において理想主義的な国家論を批判したが，グリーンについては再評価しているようである．ラスキは個人と国家，私的善と公共善とをどのような関係において考えるべきかという問題意識からグリーンやボーザンケットを見ている．この問題に対する解答はグリーンが適切な表現によって与えているという．「社会が保証するある力をもつべき個人の要求または権利，そして社会が個人に対してある力をもつべき逆の要求はともに，これらの力が道徳的存在としての人間の使命の成就，かれ自身および他人の中に完全な性格を発展させる仕事に効果的な献身のために必要であるという事実に依存している」[35]．これは何を云わんとしたものであるだろうか．権利は単なる力ではなくて「人間の使命」を成就するために用いられ行使されるべき力である．グリーンは人間を「道徳的存在」として考え，この基本的概念が導かれなければならない．グリーンのいう「道徳的存在」としての人間は平等な人格をもった人間である．「互いに権利をもつものとして認められた一群の人格」[36] がラスキの国家であって，これはグリーンから影響された国家観である．これに対して国家を権力を中心とした一群とみるならば，市民の国家への服従は強制として受けとられ決して自発的なものとして受けとることができない．道徳的な個人（平等な権利を認識し得る個人）の外に国家の基礎が存するのではなくて，かれ自身の内にこそそれが存する，この意味においてグリーンの「力ではなくて意志が国家の基礎である」[37] という有名な言葉が理解されなければならない．個人に対する社会の権利はいかなる根拠によって正当化されるか．権利は一方的なものではなくて相互的である．いわゆる平等とはかかる権利に外ならない．「それ故，権利を認識することに失敗した国家はグリーンの見解にもとづけば，全く国家ではなくなるであろう．何故ならばそのような国家は市民の忠誠への権利を自己に与える道徳的資格を欠如しているであろうからである」[38]．グリーンにとっては市民がいかにすれば国家に対して忠誠と服従とを自発的になすことができるかが関心事とされたようにみえる．これは権力によって強制されてできるものではないことは明白である．国家への忠誠が自発的となるような国家はどんな条件を必要とするであろうか．この問題はラスキにとっても重要であったよ

うである．国家への忠誠および服従の根拠を明らかにするためにはこれらの目的，すなわち国家の目的が明らかにされなければならない．このようにみてくるとグリーンのいうように国家の目的は道徳的に考えられなければならなくなる．しかし国家は現実には実力をもっており，市民に外からはたらきかけてゆく強制力をもっていることも確かである．国家がもつこれら両面をどのように調整するか，これがラスキの課題であった．グリーンはこの調整に成功したであろうか．ラスキによれば「グリーンにおいては現実を理想と等しくしようとする努力は全くない」[39] とされた．

グリーンの「自我実現」を政治理論の基礎として高く評価している現代のイギリスの政治学者にグリーブスがいる．かれは「政治論の基礎」(1958) においてグリーン，ホッブハウス，ラスキの思想を「生活の哲学」の見地から有効なものとして見直している．たとえばグリーンについてはつぎのようにいわれている．「グリーンが云っているように『自我満足は完全に表現され，あるいは全く充実された人格の完成の観念の実現の中に永久に求められ，かつ見出される』．各人はこの観念をかれ自身の経験から建設しなければならない．かれがこの観念について要求するものはそれがかれの経験を解釈するであろうということである．かれが十分な生活を送ろうとするならば，満足を要求するかれの本性のいろいろな部分，多くの本能的な要求や他の要求があることは確かである．かれはかれにとって外的社会的宇宙，物質的条件，他の人間と満足のゆくように統合してゆくことを成就しなければならないことも確かである．しかしこの統合は内的であるとともに外的であって，『人格の完成の観念』の質を成就するためには，かれ自身の内側の衝動からくるのみではあって，かれ自身に外的な宇宙からくるのではあり得ない．自我の実現が成果となろうとするならば，意志はこの合理的衝動と一致しなければならない，行動はこの観念と一致しなければならない．それが道徳の根底にある理性と意志との本質的調和である」[40]．この一文は著者がグリーンの自我実現とホッブハウスの調和の理想とから最もよく影響されているとみられる実例である．グリーブスによれば経験は何らかの基準によって解釈されなければならない．経験とは人間性の諸部分であって，それは本能的衝動である．これは合理的に調和されなければならない．これを可能にするものが「人格の完成の観念」である．著者グリーブスにおいてはつぎの二つが問題であった．その一つは各人の内的統一はいかにして可能であるかであり，その二は外的世界（環境）と自己との調和はいかにして達成されるかということである．これらの問題は各人の内部において合理的調和的に解決されなければならなかった．

グリーブスの立場は「生活の哲学」(これは世界観ともよばれる)である．各人がいかなる「生活の哲学」をもつかによってかれの環境への適応は違う．この適応をグリーブスは「統合」とよぶのであって，これは環境を「生活の哲学」に適合させることを意味する．これは自我に中心をおいて経験を再構成して一つの宇宙を形成することであろう．グリーブスの「生活の哲学」とは何であろうか．「自我実現あるいは人格の成就は生活の実践哲学あるいは生きるために計画された設計に一致して生活を送ることを要求するものであって，この哲学は必要と欲求との合理的調和への試みを表現している……」[41]．この哲学は「生活に向うわれわれ自身の態度」[42] といわれ

ているように，人生観の哲学であるようにみえる．それは具体的計画と目的とを含んだ生活設計の哲学であるから，観念論的な人生観ではない．しかし，それは「人格の成就」を目的にしているから，単に処世術的な哲学でもない．グリーブスは理想主義をグリーンから学びとり，合理的経験主義をホッブハウスから学びとっている．「自我実現の概念はわれわれがそれをグリーンからホッブハウスおよびラスキに至る政治思想家に見出しているように，この適応の観念を表現している．すなわち，それは二つの要素の間の統一または調和を暗示している．一つの要素は知活動の領域にぞくし，もう一つの要素は物理的活動の領域にぞくしている．前者は観念にぞくし，後者は行動にぞくする」[43]．

以上の考察からわかるようにグリーンの自我実現はホッブハウス，ラスキ，グリーブスの政治論においてそれぞれ修正されつつ，批判されつつ受け入れられ，影響を与えていることがわかる．グリーンの思想は社会学者ギンスバーグにおいても注目されているところからみると[44]，いわゆる「社会科学と社会哲学」との総合を目ざすかれの社会学に何らかの影響を与えたものと見ることができる．

英米におけるグリーン研究の状況を見るとき，第一に気づくことはグリーンの政治哲学が今日まで注目されてきているということである．これに反してグリーンの倫理学はかれの死後一二の例外はあるけれども次第に注目されてこなかったということができる．もちろん，部分的には批判の対象としてとりあげられてはいるが，大きな流れからみるとき大して注目されていないとみてよい．これは何故であろうか．19世紀末においてオックスフォードにおいてあまりにもグリーンの人格的影響が大きかったために，かれが死んでから後はその人格的力が次第に人々の記憶から去って，新しい世代において忘れられて行ったのであろう．しかしグリーンは死んでもかれの思想と学問は残っているからこれを見ればそれらに含まれている真理は認められるはずである．この点は無視されたのであろうか．グリーンの著作，思想表現，その内容は20世紀に入ってからますますとりあげられなくなってきた．それは観念論的傾向の強いグリーンの倫理学が経験的分析的傾向の強いイギリス人に親しめなかったからであろう．これを支持するかのように，グリーンに反論する人々がケンブリッジを中心として育ってきた．これらの人々はシジウィックを学祖とする科学的体質をもった哲学者であった．こうして今日までグリーンは哲学史や倫理学史の中で概して19世紀のイギリス観念論の代表として僅かにとりあげられているのにすぎないのである．グリーンの倫理学を全体として深く研究する人はレイモントを除けば今世紀において見当らない．イギリス近世の哲学史の流れを見るとき，ホッブスの経験論に対してケンブリッジ・プラトニストたちが反動として現われ，ベンサムの功利主義に対してグリーンやケアードの理想主義が反動として現われていることは20世紀の後半において次に来るべき方向を暗示しているようにみえる．すなわち分析哲学がいつまでつづくかわからないがこれへの反動として別の何か新しい思想が誕生し，これによって新しい倫理学が生まれるのではないかという予想が哲学史・倫理史からいえそうである．

註

(1) ラッセルの哲学はヒュームの経験論を受けついだももとみられている (D. E. Pears, Bertrand Russell and the British Tradition in Philosophy, 1967. XI Tradition を参照)

(2) 1964 年ドイツの Scientia Verlag AAlen から D. ヒューム「哲学全集」4 巻が出版された. これは 1886 年の同全集のリプリント版である.

(3) これは R. M. レモスの序論による「ヒュームおよびロック」と題した著作であって, 1968 年にニューヨークの Thomas Y. Crowell Company からアポロ版として出版された.

(4) Hume and Locke, 1968. Thomas Y. Crowell Company, Introduction P. V.

(5) W. H. Fairbrother, The Philosophy of Thomas Hill Green, 1900, Prepatory Note.

(6) Ibid. P. 11

(7) 拙著「グリーンの倫理学」(昭和43年4月, 明玄書房), 第2部第5章「グリーンとシジウィック」を参照

(8) H. Sidgwick, Lectures on the Ethics of T. H. Green, Mr. Herbert Spencer and J. Martineau, 1902, Preface, P. V.

(9) 拙著「グリーンの倫理学」の「序論」を参照

(10) Johu MaCcunn, Six Radical Thinkers, 1910, P. 260

(11) H. Rashdall, The Theory of Good and Evil, 1924, Vol. 1, Preface, P. vii

((2) Ibid. pp. vi—vii

(13) Ibid. p. vii

(14) G. E. Moore, Principia Ethica, 1903, p. 139

(15) Ibid. p. 140

(16) W. Wallace, Lectures and Essays on Natural Theology and Ethics, 1898, p. x

(17) A. Toynbee, Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England 1884, Ninth Impression in England, 1884, Ninth Impression p. xv

(18) Ibid. p. xx

(19) Ibid. pp. xviii—xix

(20) D. G. Ritchie, Philosophical Studies, 1905, Preface, p. 5

(21) Ibid. p. 9

(22) Ibid. p. 18

(23) Ibid. pp. 21—22

(24) シジウィックは「T. H. グリーン, H. スペンサー氏, J. マーチノーの倫理学」においてグリーンがアリストテレスの倫理学を意志の見地から偏した解釈をしていることを批判し, もっと知識の面に注目すべきであったといっている.

(25) James Seth, English Philosophers and Schools of Philosophy, 1912, p. 3

(26) Ibid. p. 1

(27) この点については桑木厳翼氏の論文「英国プラトン学者はカントの先駆者なるか」(「理想」第166号, 昭和21年8月20日) を参照さたたい.

(28) R. Metz, A Hundred Years of British Philosophy (Edited by J. H. Muirhead) 1938, pp. 269—70

(29) Ibid. p. 270

(30) Ibid. p. 275

(31) Ibid. p. 279

(32) S. E. Barker, Political Thought in England, 1848 to 1914, 1915
Reprinted, in 1954, p. 46

(33) A. B. ウラム「イギリス社会主義」(谷田部文吉訳), 未来社, 1968, p. 181

(34) 拙著「グリーンの倫理学」,「序論」を参照

(35) H. J. Laski, The State in Theory and Practice, 1935, Fifth Impression, 1951, p. 62

(36) Ibid. p. 63

(37) この言葉はグリーンの「政治義務の諸原理についての講義」の第7章に当る "Will, not force, is the basis of the state" の訳であって，ラスキはこれをあたかも自分の言葉であるかのように用いている.

(38) J. H. Laski, The State in Theory and Practice, p. 63

(39) Ibid. p. 63

(40) H. R. G. Greaves, The Foundations of Political Theory, 1958, p. 105

(41) Ibid. p. 89

(42) Ibid. p. 104

(43) Ibid. p. 47

(44) グリーンの影響を受けたホッブハウスの後継者であるギンスバーグは「倫理学における理性と経験」(Reason and Experience in Ethics, 1957) においてグリーンやシジウィックの倫理学に言及しつつ，グリーンに接近した考え方を示している.